

只見短歌会

令和八年七月詠草

わが問ひに自分で考へなど男の子言ふ姿の頭がよくなるからと
目黒 富子

長年のわが通り道自転車で時流れ行き押し車なり
関谷登美子

ちりちりと線香花火玉ゆらぎ落つなど願ふ息子のまなこよ
立花 奏音

おはやふの一言を聞きサッカーの結果が判ると孫の言ひたり
新国由紀子

亡き姑^{はは}の作りし狸の紙細工目の表情に一人微笑む
渡部ヨリ子

只見俳句会

七月定例会

雑草と闘う日々やホトトギス
この頃はセミの鳴き声懐しき
信

気が付けば我が八十路の声となり
球児等の熱き戦い丸刈りに
都

短夜の明ける障子の白さかな
川柳を笑えぬ体走り梅雨
味代子

なにもなき一日終わり夕焼け雲
逝きし友植えし水仙道飾る
真理子

散歩道木々に飛び交う蟬時雨
初採りのかぼちゃ煮付けて友と食べ
睦子

戌^{いぬ}の刻^{こく}田圃は螢乱舞する
夕闇に鋏形虫の寄る樹液
尚 幸

サルビアの花に誘われ道歩く
歌碑を見る広報無線熊出没
理恵子

梅雨晴や村に久しき稚^やの声
星の夜の光の中の初螢
恒 夫

孫が言う只見の水は冷たいね
蝶生る義母^{はは}は口数すくなくて
一 恵

人生を今問い返すラムネかな
学ぶこと諦めきれず夏の夕
修 一